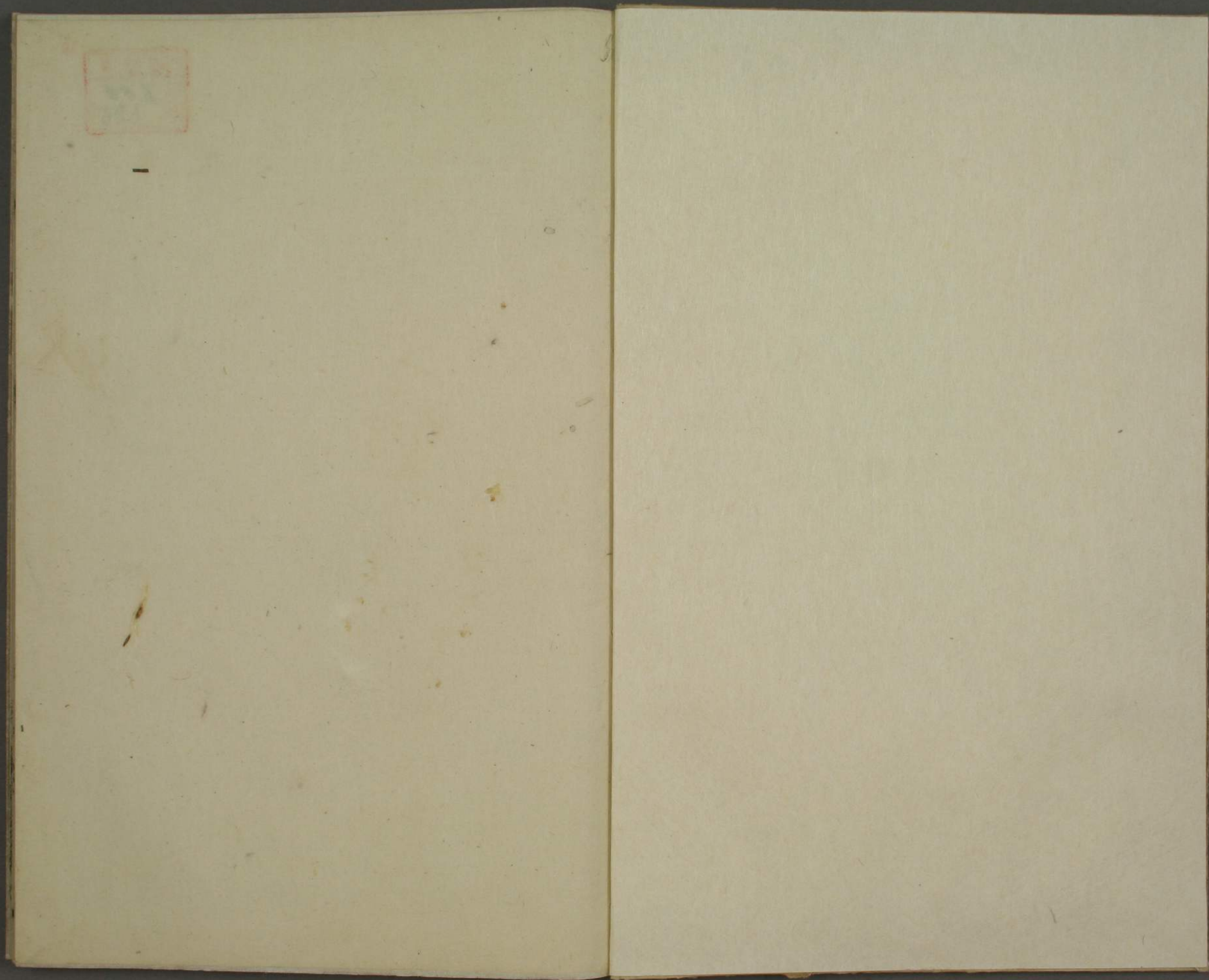




八犬傳九輯
桂心評
上帙之上

1冊
600
PWS





門
號
卷

曾

600

885

印

八犬傳九輯下帙上

愚評



里見一(Shimizu) 別子(Shimizu) 手紙(Shimizu)

八犬傳九編下帳五條 十三十四卷

けいんとうなる一併之をきくは傳に伏せし御書
あふんとそあやしや大に伝志し答にけりぬれ
折げしきかりしより再之熟思せし里見一門
正木大膳より人あきハリハそのまゝ傳と書奉り
顔の好しむよりハハせたりと云(ゆ)いといふ
うりしるは前編の末大目自が奇怪のいといと
りしうりふさむ巻をひききそりし(註)水解
せしといふおれをきこし漢方をまづるのわら
けいんすてをわらいて、奇異ハハと云りかハハ

圭窓

聖書と日本

看發して正木狐よりまことしうわたりこれ狐の
若狭より佐志の光孫御遊をしるたなふ也
片までたぬき猫をりあまは文様との歎か
れと狐いままかきりをもはむれをけり
狸猫、敵役ありをい移して狐は二つて大士の
かきそゆるも新音也妙花つ件、この狐おしく
ゆくとつふささしうれむ人カサてさうささ
この狐さとうさわらうおさしくとさ、歎のわ
とては似たり、驚、蛇のたへどりつらふく
事、自然のちふらうささし

聖書と日本
至五

才

聖書と日本
至五

一條のわらわのこえき、狐の清音はあり
この正木狐のゆき始て感の事、
狐龍の事、容易の事、
清音織りて、
意か、の妙子と、
この回と照、
今さら、
感心の、
あつば、

聖書と日本
至五

佳

志酒目を何と云ふか... 勸徳の味ふくして

又乃去

狸を水鉞の中... 又如是言生の文字の... 前後そのねい...

又乃去

おきてハ首尾あひ... 是にこけで文字の... 十七、卷十八卷

又乃去

百二十回この一回... 子孫のあやつ... 狸の皮を大山寺...

大和の法英の... 十分の愉快あり...

回、竹三法師あつ... 解、情をよめる

一々お告申年荒多しと申
 自持人小随使をすむ一助をちりきき
 くれ信者の平生勸徳をあれとて誠心
 海しててくら自お板の時ありしめら
 るふふこけく物ありとも志ひて
 積引の太刀の幸い実記みくらをく
 られるものね佐志の用つ平生実を
 わりありて実記を補ふの量る
 新

至

中まのしりといとて草の老のふら
 物をもと

星類長老と長老いちら人ふら
 一ひのあつ前集の深てふりや
 ちん又長老は作もねありその
 兄文一て解しうきと物をもと
 らと文と後集のいつを待のみ

清といとねいあまきとつち
 文とどの海といとあつち
 つね竹のねとんこまふ

至
 徳美文藝の
 小

桂宮賢親八代傳第九卷下條上洋書批答列家

十二十四の巻の序の第一則の事

此條より先づ一件先達より「魚海」伏姫の跡を尋ねんと是を
申す大に仙史に記さるる事を取けし事ありしを再考

内服書田作大服
諸元の失るる下
と云ふ人ありけり

その事やと云ふ

第三則より又云先づ「正木」の「一門」ありし事「一門」を
身方子「正木」の「付」し「正木」の「早」の「事」の「事」を
くおけしこの「早」の「事」

拙抄合

その事やと云ふ
後中より「海」を「入」るる「事」の中

又云市京布推名村の番士の某師の什器に正木大根を道の狭の
香があらうと云ふ雅也

又云夷瀆郡大田木と圓照兼作寺と云々神託あり寺歴二十五年

正木大根の眉尖刀一枚を什器と云ふ昔持する天正六年大田木

正木大根里又氏子及くび人剛強法士師と云々疾雷の如し一日

解けり取らざる動するを正木大根と云ふ里又七世も持の

二男は九と云ふ人あり大田木二年氏子の他をさて若高一老威

成と云ふるもび人なり再び正木大根と名づるもび人天正十八年

百一の物を致し日單海あり眉尖刀を揮ひ土岐氏の兵を致す雅也

願すゆると里又此と詳し今寺と云ふ所のあり人の長刀の昔又雅也

大田木大根の正木大根終つる每房の正木大根の房別館中と

大田木の傳と文代にせしむる東武の城り正木大根といふあり

び人の終つると云ふへ

著者此をて番所以てるも各通あり正木大根と云ふ所履本あり

和約五百と云ふ天の中り大目なす正木大根の由後監と云ふも

大田木大根の事と云ふと云ふの事と云ふの事と云ふの事と云ふの事

源ありく因縁あり折正木大根田原の物あり

忠と云ふ早逝の房正木大根の教と云ふれて和約五百と云ふを賜り

和約の世京士と云ふれりありへ一也正木大根の時通と云ふも大根

和約記と云ふる人の大田木の事と云ふる物ありと云ふ天の中

十七十八の巻の序の巻

百二十三回云云は回の終りのあるふその終りの歌の刊
と思ふるも一他一は元の巻の未解後集をまのり

拙答

この拙答も論をなすも又其見ると同くある
其の書言ふは後集を初めは解くもなすも拙答
まて自伝一々笑を取るとたのめ

第百二十二回の終り載る合教の詩歌

廿日年 用と結城城 秋月春花二十更

白也の木綿城の産の雪をくく年へく産あはれり此花

ふゆのまゝ本行嘉吉元年四月十六日結城城のりまゆりまゆり甲三事を歴き

文明十五年四月十六日結城城のりまゆり、大法師古蹟場を吊山念仏僧着

のり結城徳用徳利名開洋乱妨のりあり八犬伝は具是く今

結城の地は全ゆせり因て昔年用と云と云り用と島用場を

此巻の末すまゝなれり甲三事よ及へり秋月春花云云と又只

まゆり文明のり甲三事のりまゆり本行徳用と云り甲三事よ及へり

甲三事を歴き

物取のまゝなれりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

自注云ゆり結城の木綿生るるり物取まゝ本行嘉吉元年四月

十六日菅田城没落のりまゆり文明十五年四月十六日菅田城没落のり

結城のりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

結城のりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

丁酉五月十八日

著者仙舟老翁

桂馬主人の書

夏同^ニ糸^ヲ答^テ書^シし^レル^ニ止^ル也^ハ予^ハ輯^シ書^スと^シて^ハあ^らん^と
 狗^ノ宝^ノ古^ノ國^ノと^シて^ハ定^メて^ハあ^らん^とし^テ狗^ノ宝^ノの^ハ本^ノ細^ノ洋^ノの^ハ牛^ノ黄^ノ
 狗^ノ宝^ノ相^ノ似^テる^ノ瓶^ノの^ハ玉^ノの^ハ大^ノ同^ノ小^ノ異^トして^ハ茶^ノの^ハ載^レれ^ル暖^ノ温^ノの^ハも^ハり^ト
 作^レら^レる^ノ毛^ノの^ハ所^ノと^ハな^らず^ニた^らし^ム毛^ノのみ^ハ石^ノを^ハ書^スと^シて^ハい^はれ^ル目^ノ也^ト
 是^レら^ハ世^ノに^ハ絶^エる^ノ宝^ノと^シて^ハい^はれ^ルと^シて^ハい^はれ^ルの^ハ也^ト

丁酉十二月

